

たはら 歴史探訪 クラブ 其の73

TAHARA
History Inquiry Club

潮騒の伊良湖岬

〜伊良湖神社と御衣祭〜

御衣祭やごせんだら祭りでは有名な伊良湖神社の歴史はたいへん古く、創建は貞観17年（875年）にまでさかのぼり、伊勢神宮と深いかわり合いを持つ神社でありました。この神社はその昔、伊良久大明神といわれ、その元宮は陸軍伊良湖射場用地拡張のため、明治39年（1906年）に伊良湖村が現在の集落地へ集団移転するまでは、伊良湖ガーデンホテル南側にある宮山の中腹に存在していました。現在でも宮山山中には、この神社へと続く参道と、遷宮

のため上下2段に構築された境内地の跡が残っています。祭神は、栲幡千千姫命で、伊勢神宮の神御衣神事のために祭祀されたと考えられています。

次に、少し難しくなりますが、この神御衣神事が一体どのようなものであったのかに触れてみます。

三河における神御衣は、桓武天皇の代（781〜806年）に、三河大野で生産された絹糸を渥美神戸の名前で伊勢神宮に献納したのが始まりとされています。その後、清和天皇のころ（858〜876年）からは、三河大野の糸が伊良湖へ運ばれ、機織されてから伊勢神宮へ奉納されるように変わりました。三河大野から伊良湖へ運ばれてきた絹糸を供え、機織殿を潔斎し、機織された御衣を供え神事を行うための神社、それが伊良久大明神だったので。それでは、なぜ伊良湖が伊勢神宮への神御衣調進の地に選ばれたのでしょうか。その理由として考えられるのは次の二つです。まずは、伊良湖岬と伊勢との間にある海の難所とされる伊良湖水道（度合）です。伊勢神宮へ奉納する大切な神御衣を確実に輸送するためには、天候や潮の流れを十分に考慮する必要があった

のです。また、海賊などからの難を避けるためであったとも考えられます。その後、伊良久大明神で行われることとなった神御衣は、その絹糸が久寿2年（1155年）に遠州三ヶ日の初生衣神社で機織されるようになると、三ヶ日から伊勢神宮へ織布を送る途中の安置と祈禱を行う神社へと役割を変化させました。こうした神事も、中世の混乱した時代に一度は絶えてしまいましたが、江戸時代の明和元年（1764年）になると、神御衣船が今度は吉田湊から直接伊勢へ向かったことがわかってきます。このころにはすでに時代も安定し、操船技術も進歩して、伊良湖でわざわざ風や潮待ちをする必要がなくなり、伊勢へ直行したのです。

伊良湖神社で行われている御衣祭がこの神事に由来していることは間違いありませんが、現在は伊勢神宮とは直接的に関係のない、地域を中心とする祭りとなつていまして、余談ですが、明治34年から行われてい



華山が描いた伊良湖神社元宮図



さまざまな露店が並ぶ現在の御衣祭

るお糸奉獻（お糸船）の方が、前述した神事にちなんでいるといえます。御衣祭は昭和41年（1966年）まで、旧暦の4月14日（伊勢神宮の神御衣祭の日）に行われていましたが、今は4月の第3日曜日に行われています。祭礼日には神社参道の両脇にたくさんの露店が並び、半島内だけでなく、昔から関係の深い神島などからも多くの参詣者が訪れます。また、この日、地区の女性たちは、はさみや針を手にはせず、漁民たちは船の安全を祈る守護神の「船礼」を受けるということです。

今年の御衣祭は4月15日です。伝統あるお祭りに、皆さんも足を運ばれてみてはいかがでしょうか。（天野）

〔参考文献〕

『伊良湖誌』伊良湖自治会 2006年

田原市博物館 22局1720